# ぶらりわが街宮沢界隈

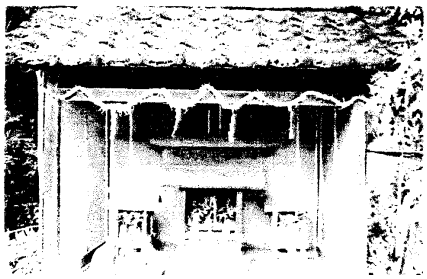
## ⑭ 水辺の散策 ―Ⅰ― 豊富な湧(わ)き水

市内の奥多摩街道に沿った多摩川河岸丘崖下(ハケ)には、いたるところに湧き水がみられる。宮沢町は、宮の沢(清泉)という地名の成り立ちが示すように、湧き水が豊富で、阿弥陀寺境内、諏訪神社境内、鈴木理夫(まさお)宅裏手などがあります。水道や深井戸を掘る技術のない時代、湧き水は、人々の生活を支えるかけがいのない恵の水でした。

○ 「水神社(すいじんしゃ)」通称「水神様」―鎮座地　宮沢町2－32－12鈴木理夫宅内
［例祭日］ 2月の初旬 ［由緒］ 祠(ほこら)の裏手の段丘崖(だんきゅうがけ)より湧き出て、東流する清泉を守護する小祠である。［社殿その他］ 本殿は小祠。祠には覆屋が設けられ、その中に御霊(ごりょう)社と稲荷社が一緒に奉祀(ほうし)されている。

○ 「水の講(こう)」―生活協同的組織―無形の生活文化遺産
「水神様」の裏手からの湧き水は、清流として東流し、門前や軒下の流路にあたる、宮沢・中神地区にまたがる20数軒の旧家では、古くから飲み水や米とぎ、風呂の水、食器洗い等に利用されてきた。「水の講」とは、この20数軒で構成される、清流の水利維持管理のための組織であり、先人たちの生活の必然性から生まれた、相当古くからある生活協同的な組織です。その使用にあたっては、清流で洗濯をしてはいけないとか、使用後の汚水(風呂の湯等)や汚物を捨ててはいけないとか、幾つかの取り決めがなされており、現在もおおむね守られ、大切に使用されているから、流れはあくまで澄んでいる。

・ 川さらいと「お日待ち」―「水神様」の例祭日の2月初旬、川さらいを兼ねて、古くからの風習「お日待ち」が行われる。お日待ちの宿は講員各家の持ち回り(宮沢・中神の年輪番制)で行われ、当日は、講中の男衆が朝のうちにその年の宿に集まり、総出で「水神様」へ参拝に行き、豆腐(とうふ)・油揚げ・神酒を供え、日頃の恩恵に感謝と講中の無病息災をお祈りし、その後、総出で川さらいを行い、汚物や汚泥(おでい)を取り除き、きれいに清掃する。川さらいが済むと、宿で酒宴が設けられる。昔は流れにウナギやフナなどがたくさんいたから、獲えて料理し、酒の肴(さかな)にしたという。日待ちに出席できない講員からは、金銭で「出不足(でぶそく)」を徴収し、(＊現在は、講員は年会費制なので酒等の提供でもある)また講員ではないが、時たまこの水を利用する人からは「思し召し(おぼしめし)」といって、金品での寄付の習わしもあるという。

○ わさび田―テレビや雑誌で紹介されている隠れた名所。―「水神様」裏の水源の小さな池に、この地域では珍しく栽培されている。わさび(山葵)は、アブラナ科の多年草で、渓流のほとりに自生し、また栽培。地下茎は肥満した円柱状で香辛科、植付け後約20ヵ月で収穫。春に白色四弁の花が開く。陽を避ける為周りは高い広葉樹に囲まれ、寒冷紗(かんれいしゃ)で覆うてます。 (＊見学の場合は宅内ですので、一声掛けをお願いします)

記　　防犯宮沢支部会計　西山　禎一